

八月十五日、盆で賑わう舞鶴港に入港し、復員手続きを済ませ、復員手当四千円を支給され、これで四年か五年は暮らせると思ったのですが、学徒出陣のときの十円程度とアンパンを買って無理だと分かりました。

四日後、舞鶴発正午の復員列車に乗り込みましたが、捕虜集団の中の捕虜となった反動の私は、ちょうどこの日、京都駅で国鉄組合が五万人首切り反対ストを行なっていて、帰省列車の集団がその応援に京都駅に座り込みを決め下車したので逃げ出すことができず、列車出発が夜中になり、郷里で家中で待っていてくれた人達に大きな迷惑をかけました。

学徒で大学在籍のまま出陣した私は、昭和二十四年八月、二十八歳で復学し、大学に三年お世話になり、三十一歳で名誉卒業をさせてもらいました。

花の青春、二十代を失いましたが、八十歳まで戦友の分まで生かさせていただき、感謝いたしております。

遙かなるシベリア 煉獄れんごくの青春

静岡県 今泉 茂

激動の世紀と言われ、目まぐるしい変転を重ねた二十世紀は、その終末間際にソ連の内部崩壊という大変動に直面した。それはロシア革命以来七十四年続いた社会主義体制の自己否定であった。スターリン体制下シベリアに抑留され、強制労働に従事したわたしには、ひとしお感慨深いものがある。シベリア長期抑留の不当性についてマスコミはほとんど取り上げず、日本史の教科書も日本将兵のシベリア抑留には長い間触れなかった。触れたのは（注1）昭和も終わりに近くなってからであった。ロシア共和国初代大統領エリツィンは、訪日した際、シベリア抑留について公式に遺憾の意を表明した。シベリア抑留問題は今や決着した史実として記録され、黒白は明白となった。抑留体験者の一人として、半世紀を越える歳月の中で風化する

ることなく鮮烈に生き続けている記憶をたどり、自己の人生に深刻な影響を与えた煉獄の青春を記してみようと思う。

虜 囚

終戦の玉音放送を聞いたのは満鮮（中国・北鮮）国境に近い山間の炭鉱集落二道溝の駐屯地であった。ここには一個中隊が駐屯し、連隊本部は通化にあった。「……朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒテ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス……」このお言葉を聞いた時は落涙滂沱として敗戦の悲しみにうち震え、集会所のあちこちから嗚咽が聞こえた。玉音放送を聞き終わって外に出ると山々は静寂に包まれ、真っ青な夏空に白雲が悠々と朝鮮国境の方に流れていた。残務整理を終え各地に分散駐屯していた部隊は通化に集結し、軍旗を焼き解散式を行った。新京（長春）や奉天（瀋陽）に家族のいる者は混乱の中を帰って行った。大部分の将兵は終戦の詔勅によって建軍以来初めて肅々として敵の軍門に降り、すべての武器弾薬を引

き渡したのである。

八月三十一日に通化を出発し列車で吉林に向かった。翌九月一日、吉林駅に到着、仮収容所となっている師道大学まで行進した。松花江の川面を渡る風は秋を告げていた。橋のもとにアーチが作られ、斬大林（スターリン）歓迎の大きな文字が目に入った。沿道を埋めた中国人達がガヤガヤと声高に行進を眺めていた。わたしには彼等が嘲笑し口々に「該！ 該！（ざまを見る）」と言っているように聞こえた。まさに四面楚歌であった。師道大学の仮収容所で一〇〇〇人単位の部隊に再編成され、今までの部隊の将校は別の部隊に配置替えとなった。新部隊編成後、閲兵、分列行進が行われ、続いてソ連軍の将官が流暢な日本語で「日本軍将兵はウラジオストク経由で帰国させる」と明言した。わたし達はこの言葉を信じ生気を取り戻したのである。

九月九日、吉林から列車で北上し、海倫を通過したのは数日後の夜間であった。開拓団から来ていた召集兵達は窓から荷物を投げ、続いて転がるように闇の中

に消えた。翌朝の点呼で人員が足りないことがわかる
とソ連の将校は激怒し、ピストルを空に向けて威嚇発
射するとともに「今後このような事が起こったら責任
者を銃殺する」とわめいた。窓越しに見える北満の広大
な沃野はどこまでも続き、時々遙かに開拓村が散見さ
れた。地平線に沈む真っ赤に燃える大陸の落日を眺め
ながら、わたしは大日本帝国の最期と重ね合わせてい
た。

九月二十三日、わたし達は北満の国境の町黒河から
アムール川を渡り、対岸のブラゴヴェンチェンスクに
到達した。この日、わたしは十九歳の誕生日を迎えた
のである。ここで糧秣の運搬作業に数日を費やした
後、待望の貨車に乗り込んだ。貨車は六〇トンで、日
本の貨車とは桁違いの大きさである。乗車口は片側に
限られ、反対側の引戸は鉄条を張り巡らしてあった。
貨車の内部は真ん中にストープが置かれ、蚕棚式に二
段になっていた。上段の隅に鉄格子のはまった硝子窓
があった。すし詰め列車が動き出すとどつと歓声が
上がった。しかし、シベリア鉄道の本線に入ると歓喜

は悲嘆に変わった。列車は南下するどころか、夕日を
追うように北西にひた走りに走っているのではないか。
「だまされた！」果てしないシベリアの荒野の夕闇の
中で聞いた汽笛。絶望的な気分にも包まれ、兵士達は声
もなく底冷えのする貨車の中にうずくまっていた。チ
タに着いたのは、すでに厳冬の十月八日であった。

チタ収容所

チタ収容所は市街地を外れた丘陵地にあった。眼下
に湖が広がり、湖岸には工場が点在し、煙突から立ち
上る煙は鉛色の冬空に溶けこんでいた。収容所は周囲
を三メートル近い高さの塀で囲まれ、四隅に望楼が
建っていた。夜になるとサーチライトが点灯して、歩
哨が交替で徹夜の警備に当たるのである。塀と平行し
て内側に約二メートルの間隔で柵があり、有刺鉄線を
張り巡らしてあった。

現役兵として環壕の歩兵二七五連隊に現地入営して
からわずか二カ月半で終戦を迎えたわたしは、自分を
律し支えていた何かをたてて崩れ、空洞化してい
くのを感じていた。これから何年続くかわからない抑

留生活に心の支えがなければ自己崩壊に至るであらう。「大君に捧げし命長らえて恥を忍ぶも国興すため」と大時代的な短歌を詠んだのも、自身の底知れぬ虚無感と戦うためであった。

苦役

わたし達はれんが工場、自動車工場、製粉工場等で働くことになった。旋盤、塗装、木工等の技術を持っている者は固定した職場に配属された。何の技能も持たない者は雑役に回され、最も骨の折れる各種の重労働に従事しなければならなかった。

最もつらかったのは、深夜引込線に入った貨車からの石炭下ろしであった。六〇トンの有蓋貨車の天井近くまで凍りついた石炭を限られた時間内に二人で下ろすのである。日本のシャベルの倍もある大きなシャベルは柄が長く、三角形の握る部分がないので扱いくく慣れるまでは大変であった。人使いの荒い監督に当たったのも災難であった。ちょっとでも手を休めると「ブイストロ、ブイストロ（早く早く）」となり、思うようにはかどらぬと怒り狂ってひわいな言

葉で罵倒する。「畜生」と思うがとらわれの身の悲しさ、身を粉にして働くしかない。下ろし終わった時は精根尽き果ててへたへたとその場にしゃがみ込んでしまった。奴隷労働とはこのような苦役を言うのだと思った。綿のように疲れて収容所へ戻る途中、ソ連の囚人の一団に出会ったことがある。誰一人話す者もなく、うつむき加減なその顔は絶望の淵に投げ込まれた者達の表情であった。

製粉工場の作業は、楽ではないが、食べ物にありつけるのが魅力であった。はるばるウクライナから運ばれた小麦、グリーンピース等を直接工場の地下倉庫に下ろしたり、倉庫に貯蔵された小麦を一輪車で運ぶ作業である。もうもうとした粉塵が作業中に舞い上がるので、のどや気管支を痛めがちであった。休憩時間には事務所のストーブで暖をとることが認められ、一日に一度は小麦粉を水で練って厚い円形のパンを作り、ストーブの上で焼くことが黙認されていた。収容所に帰るときは仲間とグリーンピース等をくすねて持ち帰り、食料の足しにしたものである。

收容所の生活を悩ます小さな敵は虱であった。全く風呂に入らない生活が投降以来続いていた。作業から帰りペチカで体が温まってくると急にむずがゆくなる。下着を調べると身の毛がよだつ程もぞもぞと虱がはっている。虱退治が夜の日課であった。

虱退治を兼ねて一度チタ市の浴場に行ったことがある。夕食が済んでくつろいでいたとき突然「入浴のため浴場へ行くから直ちに集合せよ」と伝達があった。外はとつくに零下三〇度を超えている。不承不承点呼場に集合する。集合状態は極めて悪い。ソ連兵が屋内に入って隠れている連中を引きずり出し、ようやく出発である。防寒用具に身を固めても刺すような寒気であった。黙々と一時間近く歩いて到着した。一〇〇〇人近い人数の入浴だから待ち時間の長いこと！寒さとの戦いに疲れ果てた頃ようやく順番が回ってくる。各自着衣をまとめ滅菌室のハンガーにつるす。滅菌室は一〇〇度近い熱気である。浴場の真ん中に円形の湯船があり、それを中心に同心円状に階段になってい

る。各自は小さい桶に湯船の湯をもらい体を洗うのである。チタの市民はシキミに似た植物を束ねてパタパタと体を洗っていた。サウナは熱い蒸気で浴場が温められるようになってくるはずだが、体が温まる程の温度ではなかった。早々に入浴をすませ滅菌室で衣服を探し外に出て整列、收容所に帰着した時は午前一時を過ぎていた。

忘れ得ぬ人

入ッしても旧日本軍の階級制度は厳然として存在していた。将校達は労働を免除され、工場等に作業に出る各グループにそれぞれ付き添って行った。ある日のこと将校が労働のことに容喙ようかいしたときM古年兵が反抗し、将校に胸ぐらを押されるや殴り返す事件が起きた。彼は懲罰として收容所内に臨時に設けられた営倉に入れられた。それ以来兵士達の将校を見る目が変わった。旧軍の将校の權威をかさにきた物言いに無条件に服する心情は消え失せ、理不尽な要求には堂々と意見を言うようになっていった。民主化運動以前に起きた自然発生的な風潮であった。

きびしい抑留生活の中にも心温まる思い出もある。とかく人間性を失いがちな限界状況下での出来事だけに感動もひとしおであった。風邪をひいて高熱を出し作業を休んだ日のことであった。収容所のソ連将校が日本のS大尉と通訳を伴いN軍医中尉のところへやって来た。ある工場から臨時の要請があり、作業要員が必要となったから軽症者を出すようにとのことであった。軍医「本日作業を休ませた者は皆働くことが無理な者ばかりで、既に収容所長に報告し、承認済みである」、ソ連将校「工場の中の機械を移動させる作業で長くはかからない」。「わたしは医師として人道的立場からあなたの意向には沿えない」と軍医は患者を守ろうとした。ソ連将校は怒り大声で要員を出すようにS大尉に命じた。S大尉は「お前出る」「お前も出る」と有無を言わせないすさまじい剣幕で命令した。十人近い患者はS大尉の威嚇の態度に気押されるように力なく後に従った。捕虜の立場にありながら患者を守るために筋を通し一步も譲らなかつたN軍医の態度は病人達の心をうった。過酷な環境の中で自分のこと以外

は何も考えなくなっていた人々の間にさした一条の光であった。この事件はたちまち収容所内に広がっていった。ソ連側は直ちに報復に出た。N軍医は二十数人の兵士達と共に奥地の収容所に転属となった。わたしは吉田松陰の歌をもじって「かくすればかくなるもの」と知りながらやむにやまれぬヒューマニストは」と詠んだ。別れを惜しむ多数の兵士達に見送られ去って行った若いヒューマニストN軍医の温顔が脳裏に焼きついている。

ウンドルガ収容所

最初の冬が過ぎ、春というには余りに短い夏への過渡期に、わたし達約三〇〇人はダモイ（帰国）だと言われて、チタ駅からシベリア鉄道で東へ向かった。しかし、またもだまされ、同じチタ地区のブカチャチャ炭鉱に近い寒村ウンドルガ収容所に配属された。別の収容所から来た者もあって総勢五〇〇人に満たない混成部隊であった。ウンドルガの村人が住んでいる集落の中心に小さな製材所があった。わたし達は川に沿って二キロほどさかのぼった所に落ち着くことになっ

た。収容所は山麓の原野の中にあり、北へ一〇〇メートルほど坂道を下ると幅三〇メートルくらいの川が流れ、東へ五〇メートルも行くと白樺林があった。夏にはカッコウが鳴き、山にはツツジに似た植物がピンク色を緑の中にちりばめ、日本の信州にでもいるような錯覚を起させる美しい環境であった。

伐採

ウンドルガでの作業は伐採であった。収容所から四キロほど歩いて伐採現場に到着する。鋸や斧は最初各自持って行ったが、ドイツ人捕虜達がソ連兵を道具で殴り殺す事件があったらしく、後には作業隊の最前列の者から順次一人五丁ずつ持って行くことになった。先頭から三、四列目までの者はこれだけでも一仕事であった。作業にはノルマ（労働基準量）が課せられた。ノルマによって捕虜の最大の関心事である飯の量を加減するというのである。即ち朝食に限り前日の作業成績に従って三等級に分けられる。一等食はノルマ一三〇％以上、二等食は一〇〇％以上一三〇％未満、三等食は一〇〇％未満で、各級の飯の量は、一等

食が高梁粥を飯盒八分目、二等食が半分、三等食が飯盒のふたに一杯と定められた。この規定は捕虜が飯にすら働かざるを得ないようにする絶妙の方法であった。大工、鍛冶、縫製等一定の技能を要する職種のノルマは比較的楽であったが、単純労働に関する限り、体格において劣る日本人には厳しかった。一三〇％以上の仕事量は衰えた体には過酷な重労働であった。直径三〇〜四〇センチ、高さ三〇〜四〇メートルのエゾマツ、トドマツ等を二人用のこぎりで、太さにもよるが十四〜十五本倒し、枝打ちをし、六メートルの長さに切っていくのである。もちろん枝打ちした松は定められた場所に運ばなくてはならない。夏は松脂に悩まされる他はさしたる問題はない。ここでも問題は冬である。

ウンドルガは高地だからチタ市以上にきびしい寒気である。冬季午前六時頃の気温は零下五〇度を超える。午前八時の点呼の時はまだ暗い。光の鈍い太陽が昇り始めると気温も上昇していく。気温が零下三〇度になる九時頃一組が、零下二五度になると二組が出発

する。一組、二組とは身体検査によって分類された集団である。この身体検査は極めて原始的な方法によって行われるのである。捕虜は女性の軍医将校の前に全裸で立つ。肉付きの具合、栄養状態を見た後、「回れ右」で背面を見せる。女医は尻の肉をつまんで、「ピェルヴィ（一級）、フタロイ（二級）、トリエーチイ（三級）」と分類するのである。三級に分類された者は収容所内の軽作業をすることになる。一組は最も体格のよい集団であり、並みの体格の者は二組に属するのである。わたしは下痢で痩せてしまい、一組から二組に回された。ノルマは一組と二組は全く変わらないから、二組の者は能率を上げるために体を酷使することになる。人間が肥えたり痩せたりする場合、真っ先にわかるのは尻の肉であることを原始的な身体検査で初めて知ったのである。

さて、およそ二〇センチの積雪の山道を歩いて現場に着くのが十時から十時半である。山は午後三時には暮れ始める。この間に一等食を目指して伐採することがどんなに肉体消費的労働であることか。わたしの友

人は一等食を続けているうちに痩せ衰え、収容所の軽作業に回されたほどである。わたし達ペアは一〇〇％に達するのがやっとで、一〇〇％未満のときも度々あった。

民主化運動

独ソ戦による死者二〇〇〇万人、「一七一〇の都市が破壊され、全長六五〇〇キロメートルの鉄道が破壊」される（注②）という甚大な打撃を受けたソ連は、戦後の復興建設に日本の捕虜の労働力を利用したわけであるが、単に労働力強制にとどまらなかった。

日本人捕虜を意識変革し、日本の社会主義革命を目指す革新勢力の戦列に加えることを狙っていた。一九四六年の中頃から収容所で思想教育が始まった。ハバロフスクで発行される『日本新聞』が寒村の小収容所にも毎月二回ぐらい送られてきた。日本のニュースも掲載されていたが、すべて日本共産党の立場からの論調で、日本は革命前夜にあるような報道ぶりであった。

資本主義経済の解説、レーニンの『帝国主義論』、ロシア革命、ソ連邦内の各共和国の紹介等があり、更に

ソ連の日本人捕虜収容所で民主化運動が怒とりの勢いで進展し拡大している様子を伝えていた。戦時中、マルクスやレーニンの共産主義思想は日本の国体を否定する過激な思想であると習ったが、思想内容については全く知らなかった。「大皇制」という用語を『日本新聞』で初めて知った。日曜日には資本主義の経済法則とか帝國主義の解説を丹念に読み返し、マルクス・レーニン主義の初歩をおぼろげながら理解した。大いに教えられるところがあつたが、捕虜という特異な環境の中で、限られた資料により早々に結論を出すことには慎重であつた。自由な身となつてから他の理論と比較考量してみようと思つた。満州の大学で諸民族学生と共同生活を送り切磋琢磨する中で、日本で一方的に注入された知識が必ずしも正しいとは言えないことに気付いた苦い経験をしていたからである。だが、自分の意見については用心して決して口外しなかつた。激しい民主化運動の大波をかぶらなかつた山村の小収容所も「革命」と無縁であることはできなかつた。

三〇歳前後の一人の兵士が政治部將校の指導のもとに

労働を免除され、壁新聞で啓蒙活動を始めた。噂によれば彼は大学時代から左翼運動の経歴の持ち主で特高の環視下にあつたが、終戦間際に召集されたとのことであつた。彼が真つ先に論じたのは天皇制打倒についてであつた。菊の紋章のついた提燈が燃えている絵が添えてあつた。今まで現つ神（あきつかみ）と仰いだ天皇への批判は、兵士大衆に強烈な衝撃を与えた。収容所内の上（ソ連側）からの民主化は着々進み、今まで曲がりなりにも続いていた旧軍の秩序と規律は徐々に否定され、その統率者である大隊長を中心とした將校団は兵士大衆から切り離され、新たに民主委員によつて推挙された労働者出身の委員長のもとに新しい秩序と規律が形成された。民主委員は兵士大衆に向かつて「今やノルマの超過達成と民主化の前進こそ社会主義の磐ソ連を守り、世界平和に貢献する道である」と声高に煽動した。しかし民主委員が期待したノルマの超過達成を持続することは容易ではなかつた。民主化運動はこの収容所では、期待された下からの盛り上がりには欠け実を結ぶことなく終わった。このまま

抑留生活が続いていたら厳しい批判が起こり、民主化運動は激化の一途をたどったであろう。まだ運動の頂点に達する前であり、山奥の収容所であったため、密告による反動分子のつるし上げと自己批判の強要という「革命」の狂気もたらす同胞相せめぐ悲惨な体験をしなかつたことは、せめてもの救いであった。

死線彷徨

伐採の日々が続いたある日、悪寒を覚え検温すると三八度あり、作業を休むことになった。夕方仲間が作業から帰るころ急に息苦しくなり、呼吸する度に何本もの針が肺に刺さるような痛みを感じ医務室に運ばれた。検温の結果四〇度近くもあり肺炎と診断され、収容所内の病室に入ることになった。当時肺炎の薬などあるはずもなく、できることと言えば部屋を暖かくして湯を沸かし、空気の乾燥を防ぐしかない。熱が下がるかどうかは数日の勝負である。苦しい息づかいにもうろうとした意識の中で、こんな所で死にたくないと思ひ、敗戦後の祖国でわたしの帰りを待つ父母や姉妹の顔がぼんやりと浮かんだ。寿命があつたと言うべき

か、若い生命は肺炎に打ちかつた。「もう大丈夫だ。命拾いをしたな」とK軍医に言われたときは、「ありがとうございます」と言うのがやっとで、涙がとめどなく流れ枕をぬらした。

捕虜達は夏の間収容所近くの原野に幾つも墓穴を掘らされた。冬の死に備えるためであつたが、何とも気のめいる作業であつた。北海道出身の同年兵は突然の腹痛で七転八倒の苦しみを訴え、入室後間もなく死亡した。K軍医が解剖した結果、回虫が腸より胃に入り、胃壁に穴をあけていた。色白の好青年であつた。部隊は違つたが、なぜか気が合つてよく話をした。彼の余りにもあつけない死に愕然とした。病が癒えて退室すると、彼が埋葬された墓に向かい冥福を祈つたが、生前、彼と交わした言葉が耳もとに残り、やりきれぬ思いであつた。自分も危うく墓に入る寸前まで行つたことを思い、運命的なものを感じた。

ダモイ

退室後は収容所内の便所の清掃、薪割り等の作業に明け暮れているうちに、二度目の春が訪れようとして

いた。この頃またダモイの噂が流れ始めた。シベリア鉄道で抑留者が次々東へ向かって輸送されているのを見たというのである。今度の噂は本当であった。『日本新聞』が抑留者の帰国を報道したのである。「生きて祖国へ帰ることができる」誰の思いも同じであった。思わず「万歳」の歓声が収容所の室内を揺るがし、いつになく明るい談笑が続いた。

わたし達は一週間近くかかって赤旗がはためくナホトカに到着した。四月の上旬を過ぎてでもナホトカは満目蕭条とした冬景色であった。それでも日差しは暖かく、海は心なしか春めいた色をたたえていた。ここではテント生活であった。毎日、日本軍捕虜の総指揮をとる民主委員のお歴々の煽動叱咤にこたえて『赤旗の歌』『インターナショナル』の練習があった。元気のない集団は乗船を後回しにすると言い、「反動分子のいる集団はもう一度収容所へ送り返すとすごみ、民主委員が各集団の練習の様子を見回り監視していた。皆帰りたい一心で使役のとき以外は、朝から晩まで声もかれんばかりに練習また練習であった。若いアクチブ

(活動家)は「革命戦力を強化するために、なおしばらくナホトカに残って頑張ろう」と呼びかけていた。呼びかけにこたえて幹部候補生だったHは残留を志願した。

昭和二十二(一九四七)年四月二十五日、わたし達の集団はナホトカ港から信洋丸のタラップを上った。夢に見た乗船である。出帆を告げるドラの音に、万斛の涙をのみシベリアに果てた同胞に黙禱を捧げ、最後の別れを告げた。去り行く春浅いシベリアの風景を眺めながら、冷たい風が心の中を吹き抜けていくのを感じた。二年近く心に空洞を抱えたまま生き長らえてきたが、これからこの空洞を充填できるのはいかなる精神であろうか。自ら求めてつかむ思想以外にはないはずだ。日本に帰ったら何としても確固とした人生観、世界観を構築するために再出発しようとする自身に誓った。

四月二十九日、舞鶴港に到着した。まばゆいばかりの新緑が海面に美しく映えゆらめいていた。「山紫水明」の言葉がびつたりりの光景を目の当たりにして、祖

国へ帰った喜びと感動が内奥から沸き上がってくるのを覚えた。

再出発

シベリア抑留生活でわたしが自分に課した問題は二つあった。一つは日本の進路に関し、他の一つは人生観に関する問題であった。一人の人間が決断し行動するという意味では、両者は密接に関連する問題でもあった。前者を考えるために経済学を専攻し、マルクス・レーニン主義はもちろん近代経済学、特にケインズ理論を学んだ。戦後の三大経済改革、すなわち農地改革、財閥解体、労働の民主化によって、半封建的と規定された日本資本主義は近代化の基礎が確立された。特に農地改革によって自作農の比率が圧倒的に高くなったこと、新憲法によって議会制民主主義が保障されたことで、日本ではソ連型の社会主義革命の可能性はなくなり、社会的不平等を是正するためには西欧型の福祉国家が望ましいと考えた。後者について決定的影響を受けたのは、アウシュヴィッツの体験を書いた『夜と霧』の著者フランクル博士であった。比較を

絶する凄惨な生き地獄の中にあつて、人間としての内的自由と尊厳を持ち続けたことに深い感動を覚え、博士の思想を学んだことが自己開眼への契機となった。

シベリア抑留と復員後の長い結核との闘病生活にわたしの青春は失われたが、逆境に耐えたことでより深く人生を知り、宗教や社会思想への関心を高めることができた。自分なりに真摯に戦後を生き抜いたことに慰めを見出している。

新資料所感

ソ連崩壊後、資料が公開され、従来推測の域を出なかつた抑留問題が明らかになってきた。NHK報道(注3)によれば、スターリンは対日戦争参加とともに釧路―留萌を結ぶ北海道北部の占領を企て、トルーマンに通告した。しかしトルーマンは拒否し、単独占領意思を明確に示した。スターリンは北海道北部占領を断念し、八月二十三日、留保していた関東軍捕虜のシベリア連行を指令したと言われている。スターリンは昭和二十年二月、ヤルタ秘密協定で、ドイツ降伏後二カ月または三カ月後の参戦を確約し、同年四月から

詳細な日本人捕虜計画を立て、収容所のネットワークづくりを始めている(注4)。米国の日本単独占領も予想して両様の戦略を立てていたと思われる。NHKの報道が正しいとすれば、関東軍将兵は、ソ連が北海道北部を占領できなかった代償としてソ連に抑留されたことになる。東西冷戦の中で北海道北部に人民共和国ができ、日本は分断された国家として、東西ドイツに見るような悲惨な歴史をたどったかもしれないのである。日本民族の悲劇を思うとき、日本軍将兵のソ連抑留による苦役と六万に及ぶ同胞の死は、分断国家にならないための犠牲であり、祖国のために大いに貢献したことに意義を見出すべきであると思う。

注

(1) 例えば

『新編 新しい社会歴史』中学生用(東京書籍)

『新 詳説日本史』高校生用(山川出版)

(2) ミリオナーネ全世界事典 ソビエト連邦(学習

研究社)

(3) NHKスペシャル「極東戦略と戦争捕虜」

一九九四・八・一四 テレビ放送

(4) 注(3)

【執筆者の紹介】

大正十五年九月二十三日 出生

昭和十九年三月 愛知県立豊橋中学校卒業

昭和二十年四月 満州国建国大学前期修了

五月二十三日 現役兵として歩兵第二七

五連隊に入営

昭和二十二年四月二十九日 舞鶴港上陸

昭和二十六年三月 名古屋大学経済学部卒業

昭和四十年から同六十一年までの間は、静岡県立高

校教員として勤務され、県立浜松西高校の教頭を最後

に退職された後、昭和六十二年から平成九年まで、県

立湖西高校特別講師、豊橋市藤ノ花学園女子高非常勤

講師を務める。

その後は現在まで晴耕雨読の過日

(高知県 東山 林)